

テーマ：景気動向指数（2018年4月）

発表日：2018年6月7日（木）

～3ヶ月連続の上昇だが、1月の落ち込み分はまだ取り戻せず～

第一生命経済研究所 経済調査部
担当 主席エコノミスト 新家 義貴
TEL:03-5221-4528

内閣府から公表された2018年4月の景気動向指数では、C I一致指数が前月差+1.7ポイントとなった。内訳では、耐久消費財出荷指数や投資財出荷指数、生産財出荷指数などの押し上げ寄与が大きい。4月の鉱工業指数では、生産指数は前月比+0.3%と小幅上昇にとどまっていたが、出荷指数は前月比+1.8%と比較的強かった。こうした出荷の持ち直しを受けて、4月のC I一致指数でも出荷関連の押し上げが大きくなっている。

これでC I一致指数は3ヶ月連続の上昇となったが、まだ直近のピークである17年12月を1.2ポイント下回っており、18年1月の落ち込み分（前月差▲3.9ポイント）を取り戻し切れていない。持ち直しの途上にはあるものの、その戻りは強いものではないという評価になるだろう。また気になるのが、

（出所）内閣府「景気動向指数」

5、6月の生産予測指数が弱いことだ。経済産業省の試算値では5月の鉱工業生産は前月比低下が見込まれており、6月についても反発は予想されていない。4-6月期平均で見ると増産になる可能性が高いが、1-3月期の落ち込みを取り戻すことは難しそうだ。C I一致指数は鉱工業生産と関連が深いので、生産と同様に、C Iでも4-6月期の回復の足取りが鈍いものになる可能性があるだろう。

野菜価格高騰や天候不順などの1-3月期に下押し要因となった問題が解消されており、個人消費で反発が見込めること、好調な海外景気を受けて輸出が増加基調で推移すること、設備投資が好調に推移することなどを背景に、4-6月期は1-3月期の落ち込みからのリバウンドが見込めるというのがメインシナリオだが、下振れリスクに十分注意が必要だろう。

○ 基調判断は「改善」維持

内閣府によるC I一致指数の基調判断は、19ヶ月連続で「改善」となった。基調判断が「足踏み」に下方修正されるためには、「3か月後方移動平均（前月差）の符号がマイナスに変化し、マイナス幅（1か月、2か月、または3か月の累積）が1標準偏差分（1.02）以上」という条件と、「当月の前月差の符号がマイナス」という条件を同時に満たす必要がある。前月（3月分）は、前者の条件は余裕をもって満たしたが、後者の条件を辛うじて満たさなかった（前月差+0.2ポイント）ため、基調判断はギリギリのところまで下方修正が回避されていた。4月については、3ヶ月後方移動平均前月差の値が0.90と4ヶ月ぶりにプラスに転じており、基調判断は特に問題なく「改善」が維持されている。

